

過去の生活文化を掘り起こし 未来を考えるきっかけに

谷直樹 Tani Naoki

住まい文化をテーマにした「大阪くらしの今昔館」

36年前、私は国立民族学博物館の梅棹忠夫館長が主宰する『Seventy-seven keys to the civilization of Japan (日本文明77の鍵)』の出版プロジェクトに参加した。この本は、日本で開かれた世界の有名ホテルの総会に合わせて作った英語版の日本案内である。「日本人はどこからきたか」「自由都市」「大坂」「黒船」「テレビ」「ニュータウン」など日本の歴史のキーワードを世界的・歴史的パースペクティブの中でとらえ、外国人に理解してもらおうことを目的に編集された。併せて日本人自身が見落としてきた日本文明の姿を明らかにしようとする、当時としては画期的な企画であった。

2001年、大阪の住まい文化をテーマにした「大阪くらしの今昔館」(大阪市立住まいのミュージアム)

が開館した。私は、館長として梅棹プロジェクトで学んだことを応用することにした。「住まうこと」を通して、「歴史に学び、世界と比較し、現代を知り、未来を考える」というコンセプトを展示の基本に据えた。

当初は日本人来館者だけであったが、2003年の観光立国宣言以降、政



たに・なおき

1948年生まれ。「大阪くらしの今昔館」館長。大阪市立大学名誉教授。専門は、建築史・居住文化史・博物館学。今昔館の先駆的な企画・運営で日本建築学会賞および同教育賞などを受賞。著書に『町に住まう知恵——上方三都のライフスタイル』(平凡社)など。

上方の生活文化・建築文化の研究を通して、日本の伝統文化の魅力伝えてきた「大阪くらしの今昔館」の谷直樹館長。過去の学びから現在、未来を考えようとするその姿勢は、「ルネッセ」の理念と共鳴するものだ。これまでにCELと連携して行ってきた多くの活動を振り返りながら、成果や今後の展望を語っていただいた。

CELと共同で行った外国人のための住まい劇場

こうした状況の中で今昔館では、2017年、内閣官房の「オリンピック・パラリンピック基本方針推進調査」の採択を受け、「外国の皆さまと考える、和の住まい文化劇場」——上方の生活文化を感じる一日が開かれた。これは今昔館の再興町家と、地元にある吉田家住宅(1921年建築、国の登録有形文化財)を舞台に、外国の方と大阪の「和の住まい文化」を再発見する試みである。イベントに際して、今昔館と連携協定を結んでいるCEL(大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所)の全面的な協力を得た。池永所長と弘本研究員には、企画だけでなく、文化・芸術団体や関西の領事館との交渉をお願いし、事業の成功へと導いていただいた。イベントの内容は、まず着物姿で

今昔館の町家を見学し、演劇形式の案内によって当時の暮らしぶりを学び(大坂町家劇場)、つぎに吉田家住宅に場所を移して上方舞・茶の湯・書道など上方文化の粋を体験するというスケジュールで、3日間に17カ

国58人の外国人の参加があった。さらに「上方の生活文化」を考える総括シンポジウムでは、生活の場である住まいから和の文化を体験する機会が少ないことが報告され、今後の住まい・まち・都市戦略、文化・観光などについて意見が交わされた。

参加者のアンケートからは、上方の生活文化を深く知りたいという回答が多く寄せられた。

江戸時代の私塾にならった上方生活文化堂

シンポジウム取材した産経新聞社の安藤編集企画室長(当時)から、池永所長と私に連続講座開催の申し入れがあった。そこで、江戸時代の私塾をイメージした「上方生活文化堂」(産経新聞社主催、CEL・今昔館の企画)を開講し、大阪の伝統的な「衣・食・住・遊」



「大阪くらしの今昔館」で行われた「大坂町家劇場」では、外国人の方が和服姿になり、さまざまな文化を体験した。

の文化を、実物資料の鑑賞と上方料理によって学ぶというメニューを提案した。それにふさわしい場として吉田家に座敷の開放をお願いし、床・柵・書院をもつ8畳間と隣の6畳間を「続き間」として使い、床の間に季節の掛軸やひな人形・五月人形を飾った。講座は、今昔館所蔵『浪花行事十二月』の紹介に始まり、今昔館の学芸員と池永所長による実物資料を交えた大阪の生

活文化に関する話、最後に若手才料理人である榊山一希氏の手になる上方料理を味わうという趣向である。毎月1回、20人の小さな講座であるが、受講者からは高い評価をいただいていた。

日本文化の紹介は、これまで、茶の湯や歌舞伎など日本独自の文化を強調してきた。しかし、グローバル時代における日本紹介は、さらに一歩進んだ仕掛けが必要になる。今回、CELと共同で企画した「和の住まい文化劇場」と「上方生活文化堂」を通して、住まいにおける和の暮らしや「もてなし」の生活文化の魅力を伝えることがきわめて有効であることが実証された。とくに外国人にとっては、自国の暮らしと比較しながら日本の生活文化を体験することで、知識だけの理解では得られない共感が生まれる。日本人にとっても昔の文化を学び、今と比較することで、これからの文化を考えるきっかけになる。まさに「大阪くらしの今昔館」の名前通りの効果である。

「過去を掘り起こし、本質を読み込み、現在・未来へとつなぐ」。これは池永所長が提唱する「ルネッセ」の理念であり、今昔館の目的とも重なっている。CELと今昔館が、それぞれノウハウを出し合い、連携して事業を展開することで大きな成果を残すことができた。「大阪くらしの今昔館」は、これからもさまざまな団体と連携し、住まいの文化を通して大阪における文化創造の一翼を担いたいと願っている。



天保初年(1830年前半)の大坂の町並みを再現する、「大阪くらしの今昔館」。



「ナレッジキャピタル大学校」にも参加した谷氏。「『大坂城と船場が輝いていた時代』と現代を問う」と題した講義が行われた。